

日本福音主義神学会 2014年全国研究会議 応答講演「福音主義の教理」簡略版

正木牧人

提出2014.7.31

私たち日本福音主義神学会はこのたび「福音主義」を再検討し次世代につなげていく。私たちに未来は隠されている。たとえば過去2回の日本伝道会議の周辺を思い起こすと明らかである。戦争の世紀、20世紀を終える2000年に開かれた日本伝道会議のテーマは「和解の福音」という希望に満ちたものであった。その直後の2011年、世界は9.11により戦争が終わるのではなく始まるということに衝撃を受けた。混迷を極める世界に対し、2009年の日本伝道会議では「危機の時代の宣教協力」という応答をした。そのあと私たちは2011年の3.11を経験した。

私たちの住む世界は変化している。世界の福音主義諸教会は課題をどう受け止めてどのように応答しているだろうか。予見できない未来にむかって私たち日本の福音主義諸教会はどのように備えていくのだろうか。

関野祐二氏はこの課題に身近なポスト3.11の課題、「福音主義」の定義にかかわる聖書信仰、そして、様々な新しい状況に対応するなかで与えられた気づきをもとにした福音理解に注目して議論を展開する。これに世界の文脈を視野に入れつつ応答したい。

そこで応答講演として、まず世界の福音主義運動の傾向を要約し、新しい状況に答える手がかりの概念として世界と日本で普及してきた思想を取り上げ、福音主義のよって立つ聖書信仰を他宗教の関わりにも視野にいれつつ取り上げ、そして聖書的、宣教的の世界観、歴史観を検討したい。

まず世界の福音主義運動の動向をとらえる手がかりであるが、世界ローザンヌ運動のもつ宣教の神学に注目し分析する。特に、私たちの文脈では関野氏の言及する1974年の第1回ローザンヌ世界宣教会議で採択された「ローザンヌ誓約」に記されている「伝道と社会的責任」についての考察が重要となる。この項目は南米の福音派神学者であり指導者であるルネ・パディラやサムエル・エスコパルらの貢献もありローザンヌ誓約に盛り込まれたと言われている。2010年の第3回ローザンヌ世界宣教会議に至る世界の福音主義諸教会の社会的責任に関する神学的取り組みに注目する。

世界の福音主義運動の動向を簡単に探ったあとで、世界と日本の教会で広く普及してきた「Missio Dei」の概念を検討する。1958年のビーセドムの同名の著作で広く世に知られた概念であるが、その背景にカール・バルトの神学的影響が見られる。エキュメニカルグループやカトリック教会だけでなく、近年は福音派諸教会で話題にのぼる。21世紀はカール・バルトの再評価と脱却の世紀になるのかもしれない。

第3に、関野氏の課題とするポスト3.11の神学の営みに欠かせない他宗教との関係、他宗派との関係について考察する。世界では「ローザンヌ誓約」を宣教協力のための共通の信仰告白のように用いているところが多い。すなわちこの誓約に署名による連帯がある。私たちは内容に踏み込んだもう少し緻密な議論を必要とするのではないか。無誤性等の聖書論ひとつをとって

も聖書解釈学における自由主義陣営との方法論的違いはかつてに比べて少ない。義認と聖化の文脈での神学的倫理学、そして教会論などの検討が福音主義諸教会の宣教協力、教会協力に際して重要な土台となる。

最後に、「福音主義」が共有する世界観、歴史観について考える。創造、救済、完成という三位一体論的な伝統的組織神学のアウトラインの中で、これまで伝道熱心な「福音主義」は救済論を強調してきたのではないか。昨今、これまで相対的に軽視されてきた創造と完成についての議論が「福音主義」運動の中で救済論と同様に強調される傾向がある。イエス・キリストの生涯と十字架と復活にあずかる洗礼によってすべての罪を赦され、新たな命を得た者が、人間として、キリスト者として、この世に生きる召しは何なのであろうか。カトリック的な自然神学や、救済と分離された段階的、達成的な終末論に陥ることは避けながら、救済論から区別されるが分離されない創造論と終末論を考察する。

関野氏はルターの宗教改革を福音主義神学の誕生と位置づけ、21世紀の日本の福音派諸教会が同様の情熱と知恵をもって神のみ旨を生きる自覚を促す。私たち「福音主義」者は、聖書に聞くこと、考えること、働くことの連鎖に召され、その輪の重なりや広がりの中で生かされている。